

日本と
名古屋を
変える
フロントランナー

07

医療政策の論客が愛唱 する「ヨイトマケの唄」

医療・介護のオピニオンリーダー、日本福祉大学・新学長に宿る「人情」。

今年、創立60周年を迎える日本福祉大学。この4月に学長に就任した二木立は医療経済・政策学を研究する傍ら、メディアで医療・介護政策について発言する機会も多い。最近では日本のTTP参加がもたらす薬価高騰を懸念、警鐘を鳴らす。

日本福祉大学は社会福祉系の4年制大学としては「老舗」。だが、少子化の進展で「地方の中規模私立大学」を経営する舵取りは多難だ。進学において地元志向が強かった中部圏の受験生も首都圏、関西圏に流れる傾向にある。

「ただ、一般的に医療は『永遠の成長産業』と言われている。医療、介護、保育などを含んだ広義の『ふくし』分野へ人材を送り出せるわれわれはとても有利な位置にある」と二木は言う。

「福祉」から「ふくし」へとウィングを広げるため二木に課せられた任務は、2015年の「東海キャンパス」開設と同地での看護学部新設

構想だ。地元・東海市のバックアップを受けた名鉄太田川駅周辺の大規模再開発の目玉でもある。隣接する知多市と東海市の市民病院を統合、27科、約470床で15年度に開院予定の「西知多総合病院」が看護学生の研究場所の中心となることを想定する。それと同時に福祉開発学部も移転させるが、その狙いはこうだ。

「経済学部は東海キャンパス移転を機に地域経済と保健、医療福祉の経営を学ぶことを特に重視します。自然豊かな現在の美浜キャンパスよりも『都市型』の東海キャンパスに移



日本福祉大学学長

にぎ・りゅう●1947年生まれ。72年東京医科歯科大学医学部卒業。医学博士・社会福祉学博士。85年から日本福祉大学教授、2013年4月学長に。日本学術会議連携会員、日本医師会医療政策会議委員。

撮影：和田英士

徹底し、中身の改革をきっちりやる」と意気込む。

二木は2025〜30年に訪れる少子高齢化のピークを乗り越えられれば、日本福祉大学の生き残りは可能と見る。それに備えるべく理事長・学長の諮問組織として「日本福祉大学長期ビジョン委員会」を立ち上げ、教職員が定年まで安心して働ける「ビジョン」を2年以内に策定する。教員と職員は完全に平等。若手・中堅主体の開かれた組織にし、委員以外の教職員も自由に参加できる。

「『ヨイトマケの唄』を第二の校歌にしたいと思ひまして美輪明宏さんに先日手紙を書いたのです。まだお返事はいただいていませんが……」

日本福祉大学が創立された1950年代前半を舞台にしたこの歌を二木は20年以上愛唱してきた。曲のヒットは当時、「ヨイトマケ」とさげすまれていた日雇い労働者の誇りと尊厳を高めた。「どんな福祉の理論よりも彼らの地位を高め、どんな政策よりも役に立った」と二木は考える。大学の「建学の精神」にも合致すると思ひ、許可が得られれば、ビデオ講義で自ら歌うことも計画している。実証分析に基づく舌鋒鋭い論客として知られる二木の「人情」がのぞくエピソードだ。(敬称略)

ジャーナリスト●竹内一晴